

日蓮大聖人御書全集

にちによごぜんごへんじ

日女御前御返事

ごほんぞんそうみようしよう

（御本尊相貌抄）

新版
2086
〜
2089

にちによごぜんごへんじ
ごほんぞんそうみようしろう

日女御前御返事（御本尊相貌抄）

けんじ ねん がつ にち さい にちによ

建治 3 年 (77) 8 月 23 日 56 歳 日女

ごほんぞんくよう おん がもくごかん はくまいいちだ かし かずおく

御本尊供養の御ために鵜目五貫・白米一駄・菓子その数送

た そうら お

り給び候い畢わんぬ。

ごほんぞん ざいせごじゅうねん うち はちねん はちねん

そもそも、この御本尊は、在世五十年の中には八年、八年

あいだ ゆじゅつぽん ぞくくいほん はつぽん あらわ たま

の間にも涌出品より囑累品まで八品に顕れ給うなり。

めつご しょうほう ぞうほう まつぽう うち しょうぞうにせんねん

さて滅後には、正法・像法・末法の中には、正像二千年

ほんもん ほんぞん もう な

にはいまだ本門の本尊と申す名だにもなし。いかにいわん

あらわ たま あらわ ひと てんだい みようらく

や、顕れ給わんをや。また顕すべき人なし。天台・妙楽・

でんぎようとう

うち

かんが

たま

ゆえ

ことば

伝教等は、内には鑑み給えども、故こそあるらめ、言に

い

たま

か

がんえん

き

こころ

は出だし給わず。彼の顔淵が、聞きしこと意にはさとりと

ことば

あらわ

いえども、言に顕していわざるがごとし。しかるに、仏

ほとけ

めつごにせんねんす

まつぼう

はじ

ごひやくねん

しゅつげん

たも

の滅後二千年過ぎて末法の始めの五百年に出現せさせ給

よし

きようもんかくかく

めいめい

てんだい

みようらくとう

げしやく

うべき由、経文赫々たり、明々たり。天台・妙楽等の解釈

ふんみよう

分明なり。

にちれん

ふしぎ

そうろう

りゆうじゅ

てんじん

ここに日蓮、いかなる不思議にてや候らん、竜樹・天親

とう

てんだい

みようらくとう

あらわ

たま

だいまんだら

まつぼう

等、天台・妙楽等だにも顕し給わざる大曼荼羅を、末法

にひやくよねん

ころ

ほつけぐつう

旗

印

あらわ

二百余年の比、はじめて法華弘通のはたじるしとして顕し

たてまつ

まつた

にちれん

じさく

たほうとうちゅう

奉るなり。これ全く日蓮が自作にあらず。多宝塔中の

おおむににせそん

ぶんしん

しよぶつ

摺

形木

ほんぞん

大牟尼世尊、分身の諸仏、すりかたぎたる本尊なり。

しゅだい

ごじ

ちゅうおう

しだいてんのう

ほうとう

されば、首題の五字は中央にかかり、四天王は宝塔の

しほう

ざ

しゃか

たほう

ほんげ

しぼさつかた

なら

ふげん

もんじゅ

四方に坐し、釈迦・多宝・本化の四菩薩肩を並べ、普賢・文殊

とう

しやりほつ

もくれんとうざ

くつ

につてん

がつてん

だいろくてん

まおう

等、舍利弗・目連等坐を屈し、日天・月天・第六天の魔王・

りゅうおう

あしゆら

ほか

ふどう

あいぜん

なんぼく

にほう

じん

と

竜王・阿修羅、その外、不動・愛染は南北の二方に陣を取

あくぎやく

だつた

ぐち

りゅうによいちざ

張

さんぜんせかい

ひと

り、悪逆の達多・愚癡の竜女一座をはり、三千世界の人の

じゅみよう

うば

あつき

きしぼじん

じゅうらせつによとう

寿命を奪う悪鬼たる鬼子母神・十羅刹女等、しかのみなら

にほんこく

しゅごしん

てんしやうだいじん

はちまんだいぼさつ

てんじんしちだい

ず、日本国の守護神たる天照太神・八幡大菩薩、天神七代・

地神五代の神々、総じて大小の神祇等、体の神つらなる。

その余の用の神、あにもるべきや。

宝塔品に云わく「諸の大衆を接して、皆虚空に在きた

もう」云々。これらの仏菩薩・大聖等、総じて序品列坐の

二界八番の雑衆等、一人ももれずこの御本尊の中に住し給

い、妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる。こ

れを本尊とは申すなり。

経に云わく「諸法実相」、これなり。妙楽云わく「実相

は必ず諸法、諸法は必ず十如乃至十界は必ず身土」云々。

また云わく「実相の深理、本有の妙法蓮華經」等云々。伝教い

だいしい

いちねんさんぜんそくじじゅうしん

そんぎよう

大師云わく「一念三千即自受用身。自受用身とは、尊形を

い

ほとけ

もん

ゆえ

みぞう

だいまんだら

なづ

出でたる仏なり」文。この故に、未曾有の大曼荼羅とは名付

たてまつ

ほとけ

めつごにせんにひやくにじゅうよねん

け奉るなり。仏の滅後二千二百二十余年には、この

ごほんぞん

しゅつげん

たま

御本尊いまだ出現し給わずということなり。

ごほんぞん

くよう

たてまつ

たも

によにん

げんざい

さいわ

かかる御本尊を供養し奉り給う女人、現在には幸いを

招

ごしょう

ごほんぞん

そうぜんご

た

添

やみ

まねき、後生には、この御本尊、左右前後に立ちそいて、闇

ともしび

けんなん

ところ

ごうりき

え

に灯のごとく、陰難の処に強力を得たるがごとく、かし

回

寄

にちによごぜん

囲

守

たも

こへまわりこへより、日女御前をかこみまぼり給うべき

なり。

あいかま

あいかま

遊女

わいえ

寄

相構えて相構えて、とわりを我が家へよせたくもなきよ

ほうぼう

もの

塞

たも

あくちしき

す

ぜんゆう

うに、謗法の者をせかせ給うべし。「悪知識を捨てて、善友

しんごん

に親近す」とは、これなり。

ごほんぞんまつた

よそ

もと

われ

この御本尊全く余所に求むることなかれ。ただ我ら

しゅじよう

ほけきよう

たも

なんみようほうれんげきよう

とな

きようちゆう

衆生の法華經を持つて南無妙法蓮華經と唱うる胸中の

にくだん

くしきしんのうしんによ

みやこ

もう

肉団におわしますなり。これを九識心王真如の都とは申す

なり。

じっかいぐそく

じっかいいつかい

欠

いつかい

十界具足とは、十界一界もかけず一界にあるなり。これ

にまんだらよつて曼陀羅もうとは申すなり。曼陀羅まんだらというは天竺てんじくの名な

り。ここには、輪りんえんぐそく円具足くどくじゆとも功德聚なとも名づくるなり。

この御本尊ごほんぞんもただ信心しんじんの二字にじにおさまれり。信しんをもつて

入いることを得えたり」とは、これなり。日蓮にちれんが弟子檀那等でしだんなとう、

「正直しやうじきに方便ほうべんを捨すつ」「余経よきやうの一偈いちげをも受けず」と無二むにに

信しんずる故ゆえによつて、この御本尊ごほんぞんの宝塔ほうとうの中へ入なかるべきなり。

たのもし、たのもし。いかにも後生ごしやうをたしなみ給たもうべし、

たしなみ給たもうべし。あなかしこ。南無妙法蓮華經なんみやうほうれんげきやうとばかり唱とな

えて仏ほとけになるべきこと、もつとも大切たいせつなり。信心しんじんの厚薄こうはくに

よるべきなり。

ぶつぽう こんぽん しん

みなもと

しかん し い

仏法の根本は信をもつて源とす。されば、止観の四に云

ぶつぽう うみ

しん よ い

ぐけつ し

わく「仏法は海のごとし。ただ信のみ能く入る」。弘決の四

い ぶつぽう うみ

しん よ い

に云わく『仏法は海のごとし。ただ信のみ能く入る』とは、

こうきゆう ことば しん はじめ

ぶつぽう じんり

孔丘の言、なお信を首となす。いわんや仏法の深理をや。

しんな い

ゆえ けごん しん

信無くしていずくんぞ入らんや。故に、華嚴に『信は、こ

どう もと くどく はは とう

し いち い

れ道の元、功德の母なり』等」。また止の一に云わく「いか

えん ほう き えん しん お えん ぎよう た えん

んが円の法を聞き、円の信を起こし、円の行を立て、円の

くらい じゆう ぐ いち い えん しん

位に住せん」。弘の一に云わく『円の信』というは、理に

よ しん お 依つて信を起こす。信 しん を行の本となす」云々。 うんぬん

げてん い かんおう しん 外典に云わく「漢王、臣の説を信ぜしかば、河上 かじよう の波 なみ た

こお ちまちに氷り、李広 りこう、父の讐 あだ を思 おも いしかば、草中 そうちゆう の石 いし、羽

の を飲 い む」と云えり。詮 せん ずるところ、天台 てんだい・妙楽 みようらく の釈 しゃく、分明 ふんみよう

しん に信 ほん をもつて本とせり。彼 か の漢王 かんおう も、疑 うたが わずして大臣 だいじん のこ

しん とばを信 ちち ぜしかば、立 た つ波 なみ こおり行 い くぞかし。石 いし に矢 や のたつ、

ぶつぽう これまた父 ちち のかたきと思 おも いし至信 ししん の故 ゆえ なり。いかにいわん

や仏法 ぶつぽう においてをや。

ほけきよう 法華經 う を受け持 たも ちて南無妙法蓮華經 なんみようほうれんげきよう と唱 とな うる、即 すなわ ち五種 ごしゆ

しゅぎよう　ぐそく

でんぎようだいしにつとう

の修行を具足するなり。このこと、伝教大師入唐して、

どうずいかしよう　あ　たてまつ　ごしゅとんしゅ　みようぎよう

道邃和尚に値い奉って、五種頓修の妙行ということをし

そうでん　たも　にちれん　でしだんな　かんよう　ほか　もと

相伝し給うなり。日蓮が弟子檀那の肝要、これより外に求む

じんりきほん　い　くわ　もう

ることなかれ。神力品に云わく。委しくはまたまた申すべ

そうろう

く候。あなかしこ、あなかしこ。

けん　じさんねんはちがつにじゅうさんにち　にちれん　かおう

建治三年八月二十三日　日蓮　花押

にちによごぜんごへんじ

日女御前御返事